

聖書:イザヤ書59章9～20節

説教:贖い主が来られる

はじめに

アドベントの三週目に入り、先ほど三本目のろうそくに火が灯されました。ろうそくと言えば、今は結婚式やお祝いの特別な場所でしか使われません。一昔前は停電が頻繁に起きたので、ろうそくは一家の必需品でした。家中が真っ暗になると、お化けが出そうで子ども心にこわがっていたときに、ろうそくの火を見ただけで気持ちが落ち着いてきたことを思い出します。

今日開いていますイザヤ書は、救い主イエス・キリストが来られる七百年ほど前に書かれたものと言われています。当時の人々にしてみれば遠い未来のことで、本当かどうかわからない、中にはたわごとのように思った人たちもいたでしょう。イザヤの時代とはどのようなものであったのか。イザヤは何を語ったのかともに見て参ります。

1 暗闇の世界

1) イザヤの時代

イスラエルの歴史を簡単に振り返ります。イスラエルが南と北に分裂した後、紀元前722年に北イスラエルがアッシリアに滅ぼされてしまいます。残った南のユダ王国は、北はアッシリア、南はエジプトという大国にはさまれながら、生き残るためにいろいろな意見が出て来る。そんな時代にイザヤは預言者として登場し、人々に神により頼みなさいと語ったのですが、大方は耳を貸さない。アッシリアのご機嫌を伺うべきだとか、いや、エジプトに助けを求めた方がよい。そういう意見が大勢を占めていた。そんな政治状況の中で、人々はどんな生活をしていたか。1章23節にこうあります。「おまえの君主たちは強情者、盗人の仲間。みな賄賂を愛し、報酬を追い求める。みなしごを正しくさばかず、やもめの訴えも彼らには届かない。」

イザヤはこのような時代に神のことばを語ります。

2) 義は届かない

イザヤの時代から二千七百年経った今と比べて下さい。困っている人たちのために法律が整備され、制度も整い、格段に良くなったという面はあるでしょう。では、すべて問題がなくなったのか。イザヤはこう言いました。9節。「それゆえ、公正は私たちから遠く離れ、義は私たちに届かな

い。私たちは光を待ち望んでいたが、見よ、闇。輝きを待ち望んでいたが、歩くのは暗闇の中。」

公正が遠く離れ、義の光が届かずに暗闇の中をつまづきながら歩くような世界。これは昔の話なのか。いいえ、いまも変わらない。

年末を迎えて一年を振り返る時期ですが皆さんのところにもいろいろあったでしょう。嬉しいことがあったという方もおられるでしょう。しかしいっぽうでは、重い病気が見つかり、手術や難しい治療をしなければならず、それで悩んでいる方もいる。配偶者との関係や子どもとの関係がギクシャクしてこじれてしまったという方もいる。そういうとき、穴の底に突き落とされたようでまったく光が見えない、そんなふうに感じるのではないのでしょうか。世の中を見ても、地位や権力を持っている人たちの不正がまかりとおっているように見える。それに対して正直な方、まじめに生きようとしている方が、理不尽な扱いを受けるのを見ると、どこに正義があるのかと思って腹が立つことばかりです。

2 主は見て

1) 公正がない

そんなとき神はどこにおられるのかと嘆きたくになります。神はどうしておられるのか。15節後半。「主はこれを見て、公正がないことに心を痛められた。」「心を痛める」と聞いてどんなことを想像するのでしょうか。「困ったな」とか「おやおやどうしようかな」といようなイメージでしょうか。

2) とりなす者がいない

もう少し読みます。16節前半。「主は人がいないのを見て、とりなす者がいないことに啞然とされた。」

ここに「とりなす者」ということばが出てきて、意外に思われるかもしれません。こんな場合は、「世を正す者」とか、あるいは「助ける者」ということばのほうがふさわしい思えるからです。なぜ「とりなす者」なのか。

とりなすというのは、関係がこじれてしまっている二人の間に入って仲裁をする役割を言います。ではいったい、いったい誰と誰がどうして不仲になったのか。59章2節にあります。「むしろ、あなたがたの咎が、あなたがたと、あなたがたの神と

の仕切りとなり、あなたがたの罪が御顔を隠させ、聞いてくださらないようにしたのだ。」

私たちが神に罪咎を犯したがゆえに、神との間に仕切りができてしまった。それで関係が壊れてしまった。たとえばこういうことです。夫婦の間に仕切りができたとしたらどうなるか想像してください。相手の顔が見えず、声も聞こえない。そんな仕切りです。たとえ仕切りのすぐ向こうに相手が立っていたとしても、今何を考えている、何を感じているか、どうして欲しいのか、まったく伝わっていかない。それはもはや夫婦の関係とは言えない。

神と人との関係もこの仕切りが問題だというのなら、仕切りをはずせばよい。問題はどうかです。原因が私たちにあるので、私たちの手では仕切りはずせない。神と人間の間に立ってとりなす者がいて、その人にはずしてもらえない。

それで神は捜したのです。だれかとりなしのできる人間がいないか。すばらしい信仰者はどうか。例えばアブラハム、モーセ、ダビデが真っ先に候補に挙がるでしょう。ところがこの人たちでさえもとりなす資格がなかった。ならばいったい誰がとりなすことができるか。

3 贖い主

1) ご自分の御腕で救いをもたらす

16節後半。「それで、ご自分の御腕で救いをもたらし、ご自分の義を支えとされた。」

この地上にだれも神と罪人との間に立ってとりなすことのできる者がいないとわかったとき、神は「ご自分の御腕で救いをもたらす」決心をされます。でもどうですか。神は、被告に対してさばきをくだす裁判官のような立場にあります。裁判官が被告を救おうとして、あなたの罪は水に流してなかったことにしますと言うのか。いいえ。神は義であり正しい方ですから、罪は罪として必ずさばかれなければならない。ではいったいどうやって神ご自身が救いの御腕を伸ばすのか。

2) 義をよろいのように着て…

17節。「主は義をよろいのように着て、救いのかぶとを頭にかぶり、復讐の衣を身にまとい、ねたみを外套として身をおおわれた。」

神は霊である方なので、何かを着るとは身につけるというように、人間がするようなことはしません。わかりやすくするために例えを使っているのだと普通は解釈されます。

そうでしょうか。もう一度16節前半を読みます。「主は人がいないのを見て、とりなす者がいないことに啞然とされた。」神が「人」を捜そうとされたことに注目してください。人の中を捜したけれどとりなす資格のある者は誰もいなかった。それほど私たちの罪が極まっている。そういう意味もあります。もう一つあるのではないか。

二千年前、神である方がマリアのからだを通して人となられて私たちのところへ来られ、この方が父なる神と私たち罪人の間に立ってとりなしをしてくださったことを知っています。であるならば、17節はたんなるたとえで言っているのではなく、神のひとり子が人の姿となれることを文字どおりに語っているのではないか。もしそうならこうなる。主のからだは罪がまったくない義というもので造られ、主の頭は救いことだけでいっぱいだった。

3) 復讐の衣を身にまとい…

では、次の「復讐の衣を身にまとい」、「ねたみを外套として身をおおわれた」はどうでしょうか。この方は私たちに対し復讐をしたり、ねたんだりしたのでしょうか。反対です。むしろそれをしたのは私たちです。祭司長律法学者たちは、人々の前でイエスによって恥をかかされたことを逆恨みして復讐します。イエスが神の国のことばを語り、人々を癒やし、奇蹟を行い、急激にイエスの人気が高まっていくのを見た彼らは、イエスをねたんで罪をかぶせて十字架に追いやりました。ご自分で身にまとったのではなく、罪人の手でねたみの衣を着せられ、十字架につるされたのです。これが神の子による、とりなしの方法だった。いったいどうしてこれがとりなしになるのか、つながらない。そこでもう一つの「贖い」ということばが重要な鍵になります。

4) 贖い主として来る

20節。「しかし、シオンには贖い主として来る。ヤコブの中の、背きから立ち返る者のところに。——主のことば。」

「贖い」とは奴隷が買い戻されて自由人になるという意味です。私たちは罪という奴隷状態にあるので、そこから救われるためには贖い金を払わなければならない。問題は誰が払うのかです。あまりにも高額なので私たちには払えません。救い主として来られる方が、父なる神にこの贖い金を支払ってくださり、とりなしてくださった。それが十字架だったというのです。

でもどうやって贖い金を払ったのでしょうか。義をよろいのように着たからだが裂かれました。その救いの頭には茨の冠がかぶせられ、血が流されました。このようにして罪のない方のからだがいけにえとして献げられたことによって支払われた。私たちの罪が赦されるためには、神のこのからだをささげられなければなりません。

5) 背きから立ち返る者のところに

最後に確認します。では誰が罪から買い戻されるのか。全員ではない。一つだけ条件がある。「背きから立ち返る者のところに。」誤解されやすいところですので、強調しておきたい。いままでの悪いことはきっぱり止め、足を洗って正しい者になったら、救って上げます、ではない。きっぱり足を洗えるなら誰も苦勞しない。悪いことだと知りながら足を洗えなくて悲しんでいる。実は、それが「背きから立ち返る者」で、そういう人をこそ主は救って下さる、と言ってくださる。

イザヤを通して告げられたこのことばは、やがて七百年後に、イエス・キリストとなって成就していきます。七百年の間、待っていた人たちがいました。彼らは主を見ることのできなかつたのですから、空しいものを待っていたということになるのか。いいえ。この方は主を待ち望む人々であれば、どの時代であろうと、どの国のものでであろうと、等しく救って下さいます。